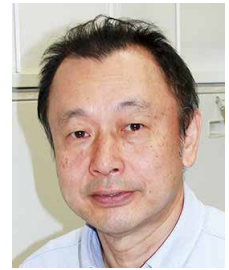


巻頭言

何事も現地現物

伊 東 敏 夫*



昨年度は、年齢的に最後のチャンスだったため、在外研究で1年間イギリスのラフバラー大学に滞在させていただきました。研究内容は、自動車分野で有名なラフバラー大学の交通安全研究チームの一員として、自動運転におけるドライバのヒューマンファクターの解析を行うことでした。

イギリス留学での関心事は、研究内容もさることながら、英語でありました。英語は国際的なコミュニケーションの基本として誰もが使えないといけないものですが、ずっともやもやしたものが付きまわっていました。それは、なぜ日本人がこんなにも英語が苦手なのかということです。多くの企業が国際的なビジネスを展開する中、英語教育を奨励し昇進条件に課すところもあり、また、大学においても本学のようにスーパーグローバル大学でなくても英語教育に力を入れております。力を入れるのは、学生の英語力が期待値に到達していないからです。アジア圏の外国人学生と比べても、日本人学生のレベルはよろしくない状況です。

日本人にとって英語が苦手なことを解明する材料は、留学に同伴した家族（恥ずかしながら遅くしてできた5歳の息子と家内）になります。二人ともまったく英語には無縁で、息子は日本語すらあやしいほどでした。彼らの1年間の英語の学習状況を観察すれば、なぜ日本人が英語を苦手とするのかかわかるのではないかと考えたのでした。彼らの英語の学習として特別なことをやらず、息子は現地の小学校任せ、家内は自習とし、私から強制するものは一切なしとしました。

イギリスの小学校は5歳になる9月から1年生となるため、日本より1年半程早くなります。したがって、2019年春に渡英しましたので、息子は1年生のイースター休暇の後学期から地元の小学校に入学しました。小学校の登校は親が引率するルールになっており、始業まで校庭で待機することになります。

その間、同級生の子供や親と懇談するのですが、現地の5歳児が話す英語と、普段大学で同僚が話す英語に大差ないことがわかりました。日本なら、5歳児の話し言葉と大学教員の話し言葉が同じ訳があるはずもないので、非常に印象深く感じました。それに、どの子供も5歳にしてはよく喋ります。日本でも幼稚園に子供を引率していましたが、こんなにも上手に会話をする子供はいなかったはず。この体験で、実は英語の方が日本語よりも容易に学習できる言語ではないかという思いに至りました。それで、息子がすぐ英語を使えるようになったかという、まったく先生の言っていることが理解できず授業に付いて行けないので、就学時間はずっと塗り絵をさせられていたそうです。

そんな状態が半年程続いた後、三者懇談があったので小学校で順番を待っている間、同級生と息子が英語で会話しているのを初めて聞きました。半年で子供同士の英会話はできるようになっていたのです。家に帰ってから英語を話すことはなかったので、てっきりわからないままだと思っていたのでした。どの程度話せるか、息子に校内を案内してと英語で聞いてみると、まともな英語で案内してくれたのでした。その英語は、たどたどしい日本語よりも流暢で、発音は現地で覚えたものなので私よりも英語らしい、というよりはネイティブ英語そのものでした。もちろん、語学の早期習得は子供だけの能力なのですが、同年齢の会話レベルからみて、このときどうも英語の方が学習しやすいのではないかという思いが強まりました。そして、その思いが決定的になったのが、クリスマス前に持って帰って来た6歳になった息子の宿題の文章です。

NORTH POLE TIMES

Breaking News: Rudolph Saves Christmas

In the early hours of this morning a red-nosed reindeer saved Christmas, by leading Santa's sleigh on the foggiest Christmas Eve in fifty years.

*芝浦工業大学 教授

Santa very nearly cancelled delivering presents to children all over the world because it was too foggy to drive his sleigh. Luckily, Santa had the idea to ask young reindeer Rudolph if he could use his bright nose to guide the sleigh through the bad weather. Rudolph was happy to help and thanks to him all presents were delivered safely. Rudolph said; "All of the other reindeer used to laugh and call me names!" Rudolph the red-nosed reindeer, you'll go down in history!

現地では6歳児が読む英語がこの程度なのです。日本の中学1年では学習していないレベルの語彙と文法で構成されています。この文章を読んで、なぜ日本人が英語を苦手とするのかわかった気がしました。それは、中学で教える英語レベルが低すぎるのではないかということです。外国語にせよ、6歳児が読む文章なら、中学1年生がわからないわけがありません。それを、例えば"I have a book."から教え、3年間習っても現地で6歳児が読む英文のレベルまで行っていないのです。これでは、英語レベルが低いままで、義務教育が終わって現実の英語に接するとレベルの差があり過ぎて苦手意識を持つのではないのでしょうか。

一方、家内の方は、渡英後しばらくはスマートフォンの翻訳ソフトを駆使して日常の買い物をしていたのですが、英語が使えないとうまく買い物ができないことを痛感し、英語の独学（復習）を始めました。そして、帰国する前には、息子の同級生のママ友とコミュニケーションが取れるようになっていました。こちらは必要に応じて仕方なく勉強してものにした、という社会人スタイルになります。家内の英語学習をみて思ったのが、そもそも日本人には英語が不要なので学校を卒業してしまえば英語を使わないため、多くの日本人は英語に苦手意識を持つのではないかと思いました。これは、母国語だけで日常生活が成り立ち、大学における高度な学問も母国語だけで成り立つ日本特有の事情も関係しているはずです。アジアだけでなく、世界中の英語が母国語でない国々は、理工系の知識は英語で学ばなければならないはずです。日本では偉大な先人達が、理工系も含めすべて英語を日本語に訳してくれたので、現代人は英語が使えなくても高度な技術を学ぶことができているということを、留学によって改めて気付かされたのであります。例えば、"information"という英語は直訳すれば「内部形成」ですが、偉大な先人達はこ

れを「情報」と訳して定着させました。なぜこのような訳にしたかということ、information（内部形成）の意味合いは、受け手がその内容を聞いて自分の内部に変化を起こす重要なものだけを受け入れることなので、日本人が内部形成するのは情（なさけ）を知ったときだということで「情報」と訳したのです。つまり、内部形成は情を報じられたときということです。明治時代の偉人達は、万事この調子で知恵を絞って、日本人にわかり易い翻訳語を造ってくれたのでした。そのおかげで、現代人は英語を学ばなくても西洋文明を享受できることになったのであります。

以上、日本人がなぜ英語が苦手なのか、私なりの解を見出せることができました。これは、英語を母国語とするイギリスに行っていなければ明確な信念としてわからなかったはずです。英語教育は私の立場上重要事項ですので、留学による研究成果と共に、現地現物の重要さを改めて痛感した体験にもなりました。御社におかれましても、英語が必要な方は案ずることなく、必要に応じて学習すればよいと思います。なぜなら、英語は日本語以上に学習しやすい言語だからです。私の研究室に滞在している外国人留学生は、日本語は非常に難しい言語だと言っています。それは文字の種類が多さだけでなく、使用される状況の暗黙の宣言を理解しないと適切に使えない言語だからだそうです。どういうことかということ、日本語には通常主語がありません。それは、状況に応じて主語を省略しても意味が通じるからで、その状況の理解（空気を読む）も含めた言語構成になっているからです。英語は必ず主語があり、空気を読まなくても意思の疎通が可能です。実際、留学先で会議に出席していると、日本人同士では考えられない発言や展開になります。誰も会議の空気を読まず、論理的に発言するからです。何となく偉い方を意識し、空気を読んで、全体が合意して方向が決まるということはありませんでした。また、英語には敬語がありません。敬意を伝えたいときは丁寧な言い回しで婉曲表現をしますが、通常の会議では誰もが同じ言葉を使います。学生も教授を名前と呼ぶ文化もあって、なおさらフランクに感じました。現状ではオンラインでの会議が増え、現地に移動することが減りましたが、現地現物で得られるものは多いと思われれます。御社におかれましても、オンラインでの業務展開を織り込みながらも、現地現物の仕組みの展開を期待しています。